

個人特性が心理学科オリエンテーションに 対する態度に及ぼす影響（2）

—personality との関連から—

心理学科 奥田亮・川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子

抄録：心理学科の新入生を対象としたオリエンテーションにおいて、学生たちがそのような企画に何を期待し、何を得たと考えているかについて、個々の学生の personality との関連性から検討した。その結果、オリエンテーションを「楽しむ」企画として期待を寄せる側面と、オリエンテーションを対人関係等の端緒とすることに期待する側面が窺われ、特に後者の達成には personality の諸側面が様々に関与していることが示唆された。このことから、学生生活を基盤づけるような対人関係の充実を促すきっかけとして、オリエンテーションを企画することが重要と考えられた。

索引語：新入生対象のオリエンテーション, personality, 学生生活

問題と目的

多くの大学で、新入生を対象とした“オリエンテーション”あるいは“学外オリエンテーション”と呼ばれる企画が実施されている。大学教育の初動時にこのような企画を行なうことは、学生たちがその後の大学生活を充実して送る上で、あるいは教員にとっては大学教育を十全に行なう上で、それぞれ滑らかなスタートを切るために大きな意義を持っており、その企画について調査を行ないデータをもとに検討することは有用であると考えられる。このような考えのもとに、佐久田・奥田・川上・坂田（2003）は、様々な大学で実施されている、学外に出掛けるなどの“企画”を含めた参加型の催しを、狭義のオリエンテーションとして定義した上で、こうしたオリエンテーションに対して学生がどのような期待をもち、また実際に経験したオリエンテーションから、何を獲得したと感じているのかを質問紙調査によって吟味した。

佐久田らが検討したのは、“学外オリエンテーション期待尺度（E尺度）”“学生生活満足尺度（S尺度）”“本年度オリエンテーション獲得尺度（G尺度）”の3つである。E尺度では、基本的には教員が学外オリエンテーションで提供し得るであろう企画内容をもとにいくつかの項目を挙げ、どのような企画あるいは機会を提供することを望むのかを評定することを求めた。S尺度では、学生が学業や人間関係を含めて、どの程度今の学生生活に満足し充実していると感じているかを評定することを求めた。G尺度では、ある程度E尺度と内容を対応させつつ、被験者が実際に経験したオリエンテーションの企画内容を考慮に入れ、オリエンテーションを通して何が獲得されたと感じているのかを測定した。そしてE尺度、S尺度を合わせて因子分析を行ったところ、“企画期待”“機会期待”“学業満足”“交友満足”“将来展望”の5つの因子が抽出された。“企画期待”因子は、「大学ではないどこか他の場所への遠出」、「泊まりがけの旅行」など、オリエンテーションを通常の授業とは違うことを行なう一つの企画・イベントとして期待する態度を示す因子と考えられた。“機会期待”因子は、「上回生（2回生や3回生）と親しくなる機会・きっかけ」「学生生活とはどんなものか聞く機会・きっかけ」など、オリエンテーションの場を誰かと知り合う、あるいは何かを知る機会として期待する態度に関する因子、“学業満足”は「大学の授業が

面白い」「心理学科の授業内容に満足している」など、大学生活の学業面での満足度を示す因子であった。“交友満足”因子は「学内の友人関係に満足している」「大学での交友関係はせまい（逆転項目）」など、大学生活の交友面での満足度を示しており、“将来展望”因子は、「資格について知る機会・きっかけ」「将来の進路について不安である」など、自分の将来に対する意識や不安の高まりに関する因子と考えられた。

これら5つの因子を、学年による違いやG尺度との関係から分析した結果、一回生では二回生に較べて企画期待が高いこと、学業面での満足度の高い学生は、企画・イベントの一つとしてのオリエンテーションに対してはあまり惹かれず、むしろオリエンテーションが誰かと知り合ったり、何らかの情報を得たりする機会となることを期待する気持ちが強いこと、などが示された。

このように佐久田らの研究において、学生がオリエンテーションに対して示す態度の全般的な分析が行われたが、学生の実態に合わせてオリエンテーションのあり方を考えていくためには、個々の学生の personality を捉え、それらがオリエンテーション企画への期待や態度とどのような関連性を持つのかを検討する必要があるだろう。そこで本研究では、佐久田ら（2003）の研究、すなわち心理学科の一回生あるいは二回生がオリエンテーションにどのような期待を抱き、何を獲得したと感じているのかに関する調査結果を、被験者の personality 特性を測定したデータと併せて、さらに詳細に分析し、個人の personality 特性とオリエンテーションに対する態度との関係について吟味することを目的とする。

方 法

被験者

大阪樟蔭女子大学人間科学部心理学科に所属する一回生138名、および二回生139名、計277名が調査に参加した。

調査実施日

2002年5月、授業時間内に質問紙調査を実施した。特に一回生に対する調査は、後述の質問項目内容の特性を考慮し、4月に行われたオリエンテーションから時間が経過し過ぎることのないよう、1ヶ月以内に実施した。また二回生に対する調査も、一回生との比較検討を行うということを考慮し、ほぼ同時期に実施した。

質問紙の構成と質問項目の作成

一回生に対しては、

- ① 学外オリエンテーション期待尺度 [E尺度] (17項目・5件法)
- ② 新性格検査 [NPI] (130項目・3件法)
- ③ 学生生活満足尺度 [S尺度] (10項目・5件法)
- ④ 本年度オリエンテーション獲得尺度 [G尺度] (26項目・5件法)

という内容から構成された質問紙を作成し実施した。二回生に対する質問紙は、一回生に対する質問紙から④のG尺度を除外し、①のE尺度の説明文を「入学して初めのころにどのような企画を体験していれば良かったと思うか」という一回生当時を想定した問いにした他は、同じ内容で作られた（詳しい個々の尺度・質問項目については、佐久田ら（2003）を参照）。

①のE尺度“学外オリエンテーション期待尺度”は、基本的には教員が学外オリエンテーションで提供し得るであろう企画内容をもとに、それらのいずれが学生の望むものであるか、即ち「学生が入学して初めの頃にどのような企画を体験すれば、後の大学生活にとって良いと考えているか」を測るために作成された。

②のNPI“新性格検査”は、柳井・柏木・国生（1987）によって作成された、「性格の特性理論にもとづき、健全な正常人に関する性格の多面的特性を測定するための性格検査」で、12の下位尺度（“社会的外向性”“活動性”“共感性”“進取性”“持久性”“規律性”“自己顕示性”“攻撃性”

“非協調性”“劣等感”“神経質”“抑うつ性”)と1つの虚構性尺度から構成されている。この尺度を選択したのは、限られた特性ではなく全体的な personality を、オリエンテーションに関わる尺度と関連させて調べたいと考えたからである。

③のS尺度“学生生活満足尺度”は、学生が学業や人間関係を含めて、どの程度今の学生生活に満足し充実していると感じているか、を測るために作成された。

④のG尺度“本年度オリエンテーション獲得尺度”は、ある程度E尺度と内容を対応させつつ、本年度のオリエンテーションの企画内容を考慮にいれ反映させながら作成した。実際に一回生たちが、今年のオリエンテーションを体験してどのように感じ、何を得たと思っているかを知るために作られた。

以上、“新性格検査”を除いて、全ての質問内容は筆者ら4名が数回にわたって検討し、上述した点に留意しながら独自に作成したものである。

手続き

被検者には調査目的を説明し、了解を得た上で調査に参加してもらった。調査票は授業時間内に一斉に配布し、被検者にその場で記入してもらい回収した。その際、各被験者は各自のペースで質問紙に回答することが求められた。

結果と考察

1. NPIの信頼性、及び13尺度の各平均得点とSD

NPIの13尺度ごとに全体(心理学科一・二回生を合わせた)平均得点とSD, Cronbachの α 係

表1 心理学科一・二回生全体のNPI13尺度の各平均得点とSD, α 係数

	平均得点	SD	α 係数
社会的外向性	21.3	4.39	.818
活動性	18.8	4.01	.738
共感性	22.6	3.71	.737
進取性	21.6	4.23	.760
持久性	20.4	4.49	.807
規律性	18.9	4.13	.691
自己顕示性	20.2	4.29	.784
攻撃性	20.1	4.23	.743
非協調性	17.0	3.82	.708
劣等感	21.0	3.90	.705
神経質	24.0	4.53	.754
抑うつ性	22.5	4.70	.801
虚構性	14.2	2.82	—

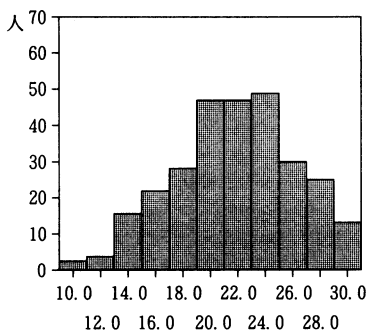


図1 社会的外向性得点の分布

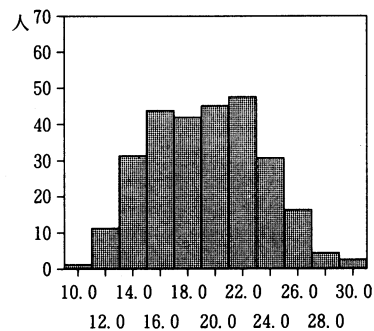


図2 活動性得点の分布

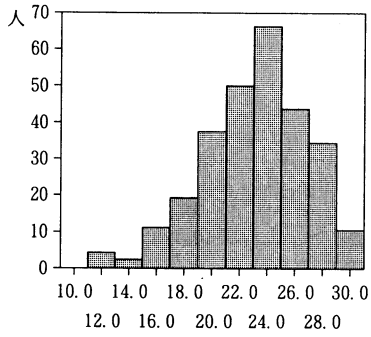


図3 共感性得点の分布

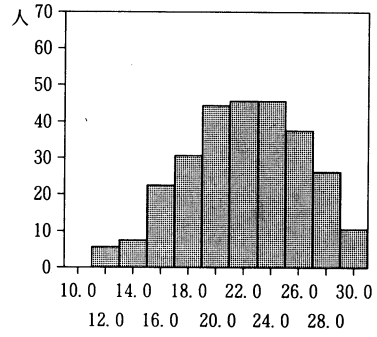


図4 進取性得点の分布

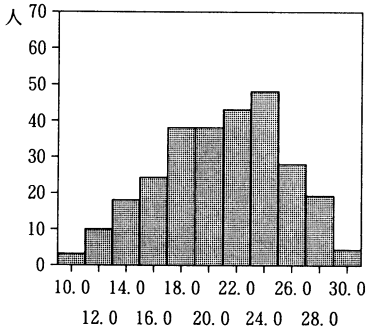


図5 持久性得点の分布

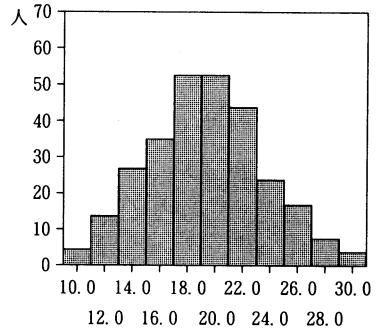


図6 規律性得点の分布

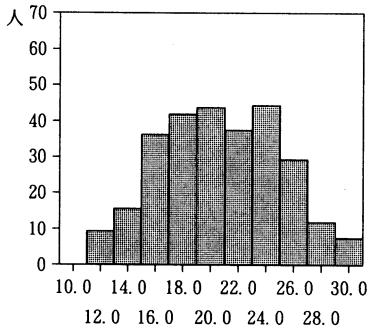


図7 自己顕示性得点の分布

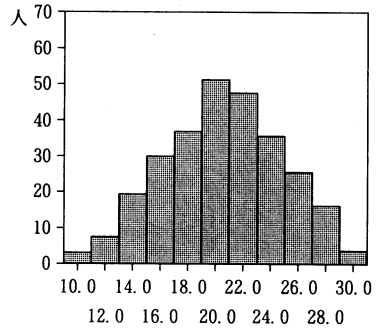


図8 攻撃性得点の分布

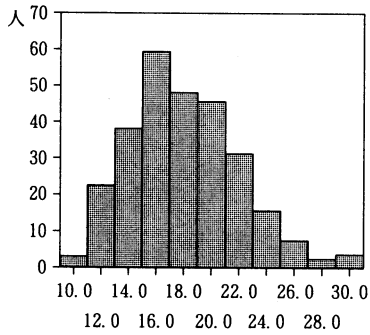


図9 非協調性得点の分布

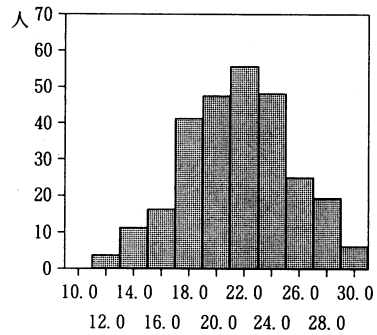


図10 劣等感得点の分布

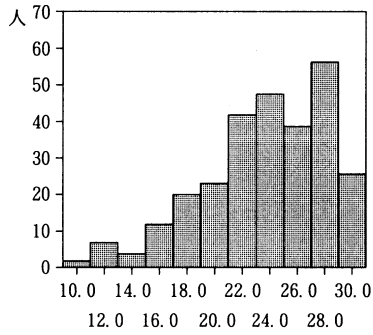


図11 神経質得点の分布

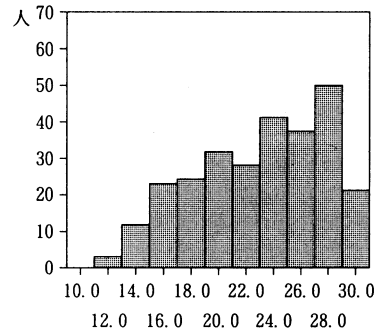


図12 抑うつ性得点の分布

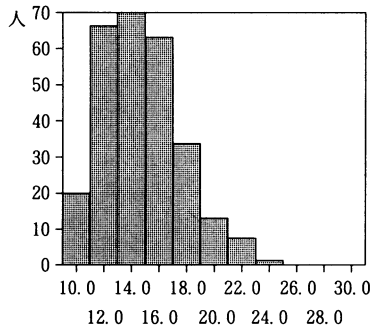


図13 虚構性得点の分布

数を算出した。この結果を表1に示す。まず、13尺度の各 α 係数はほぼ0.7以上の値を示しており、このNPIをpersonality testとして13尺度に下位分類して得点化し用いることは妥当であると考えられる。

各尺度得点は10項目×1～3点、即ち10～30点の範囲の値をとることになるが、表を見ると、全体としては20点前後の平均得点を示していることが分かる。その中でも比較的得点が低いのが“非協調性”“虚構性”³⁾であり、高いのは“共感性”“神経質”“抑うつ性”であった。なお、13尺度の得点分布をヒストグラムにして示しておく(図1～13)。13尺度とも分布に極端な偏りはなく、上述した平均得点の高低が分布にも同じような特徴として現れているのが分かる。柳井ら(1987)が一般の高校生・大学生・社会人を対象として行なったNPIの調査では、非協調性・抑うつ性・虚構性尺度において、得点分布が低いほうに偏っていた、と報告されており、特に抑うつ性に関する対照的な結果は留意すべきであると思われる。

以上より、今回の調査対象群の学生に見られるpersonality傾向としては、協調性・共感性が高く、対人的には相手の気持ちを察して受けとめ合わせようとし、一方で抑うつ性も高く神経質で、内的には不安定な面があることが伺える。他の社会・行動的側面では極端な偏りはないため、総じて言えば「一見は平均的で、内面的には優しくも脆い」といったpersonality像が浮かんでくる。

2. NPIの13尺度とE及びS尺度因子との相関

NPI13尺度の得点とオリエンテーション期待・学生生活満足(E・S)尺度因子との関係を調べるために、Pearsonの相関係数を求めた(表2)。“企画期待”因子は、特に“社会的外向性”“進取性”“自己顕示性”と正の相関が見られた(それぞれ $r=.260$, $r=.209$, $r=.253$, いずれも $p<.001$)。他に“共感性”“持久性”と正の相関($r=.165$, $p<.01$; $r=.129$, $p<.05$)、“非協調性”と負の相関($r=-.159$, $p<.01$)があった。“機会期待”因子は、特に相関が見られたのは“共感性”($r=.219$, $p<.001$)のみで、あとは“持久性”($r=.187$, $p<.01$)“自己顕示性”

Osaka Shoin Women's University Repository
表2 NPI の13尺度とE及びS尺度因子との相関

		E・S尺度				
		企画期待 因子	機会期待 因子	学業満足 因子	交友満足 因子	将来展望 因子
N P I 尺 度	社会的外向性	.260***	.066	.031	.386***	-.050
	活動性	.221***	.093	.062	.135*	-.022
	共感性	.165**	.219***	.088	.036	.091
	進取性	.209***	.081	.099	.031	.035
	持久性	.129*	.187**	.210***	.040	.018
	規律性	-.030	.063	.155*	-.091	.100
	自己顕示性	.253***	.151*	-.009	.013	.130*
	攻撃性	.095	-.004	-.132*	-.045	.117
	非協調性	-.159**	-.114	-.071	-.273***	-.004
	劣等感	-.094	.019	-.088	-.172**	.181**
	神経質	.008	.088	-.070	-.245***	.165**
	抑うつ性	-.004	.071	-.064	-.306***	.226***
	虚構性	-.006	-.010	.094	.253***	-.109

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

($r = .151, p < .05$)にある程度正の相関が見られた。“学業満足”因子は、“持久性”と正の相関関係($r = .210, p < .001$)にあり、他に“規律性”と正の相関($r = .155, p < .05$)、“攻撃性”と負の相関($r = -.132, p < .05$)が見られた。“交友満足”因子は、“社会的外向性”“虚構性”と正の相関($r = .386; r = .253$, 共に $p < .001$)が、“非協調性”“神経質”“抑うつ性”と負の相関(それぞれ $r = -.273, r = -.245, r = -.306$, いずれも $p < .001$)が見られ、他に“活動性”と正の相関($r = .135, p < .05$)“劣等感”と負の相関($r = -.172, p < .01$)があった。“将来展望”因子と正の相関関係にあるのが“抑うつ性”であり($r = .226, p < .001$)、“劣等感”“神経質”($r = .181; r = .165$, 共に $p < .01$)や“自己顕示性”($r = .130, p < .05$)とも正の相関が認められた。

これらの結果から次のようなことが言えるであろう。まず、オリエンテーションで外出などの企画面に期待する学生は、personalityとして行動的にも自己表現的にも積極性が高い(“社会的外向性”“進取性”“自己顕示性”と正の相関)。また、共感性や協調性とも関係していることから、皆で何かを体験したい、という基本的に学外オリエンテーションに親和性の高い学生たちであると考えられる。逆に、外に出掛けることと“神経質”“抑うつ性”などの特性とは相関が見られず、場合によっては病理性と結びつく可能性のあるこれらの personality 傾向は、外に出掛けたいか否かという期待とは余り関係がないようである。

色んな人と知り合い、広く情報も得たいとオリエンテーションに期待する学生は“共感性”が高く、対人関係を志向する側面が窺える。結果として対照的であるのは、先に述べたようなオリエンテーションで企画に期待する傾向が、personality的にもどちらかという外へと向かう、ややモノ・事へのベクトルが主に感じられるのに対し、色んな人や学生生活について知りたいと望む傾向は、より人間関係にベクトルを向けているように思われることである。この二つが、オリエンテーションを構成する際の二要素となることが考えられる。

将来展望因子の結果からは、卒業後にどのような進路があるのかを知りたいとする傾向が、“抑うつ性”や“劣等感”“神経質”などの特性と結びついていることが分かった。このことから、先のことを知りたいという学生たちの気持ちは、積極的に未来を考えるためというよりも、むしろネガティブな不安感のようなものに関係していることが推察される。

次に、現在の学生生活の充実度と personality 傾向との関連について考察すると、まず学業面での充実(学業満足)は“持久性”と関連している。真面目にコツコツと努力する personality 傾向

が、授業などに勤勉に出席参加することにつながり、大学での学業が充実していると感じやすいのであろう⁴。

交友関係での充実は、やはり社交性の高さに関連している。と同時に、交友関係が上手くいっていない学生は“非協調的”で“劣等感”“抑うつ性”が強く“神経質”である。交友関係が不全だから心理的に諸々の困難を感じているのか、その逆であるのか、因果関係は判断できないが、今回の調査対象学生群に抑うつ・神経質傾向があることを考えると、こうした学生を心理的にもサポートしていくには、彼女らの交友関係の充実が一つの鍵になってくることが示唆される。とりわけ近年の学生の特質として、対人関係を結ぶ力の脆弱さが数多く報告されており（例えば古沢, 2001）、大学授業においてもこの点を考慮した工夫が幾つか紹介されている（浅野, 2002；島田, 2002）。今回の調査研究の最終的な目的でもある、オリエンテーションの内容と方向性を考えるという面でも、学生生活を基盤づけるような対人関係の充実を促すことが一つの重要なポイントとして挙げられるであろう。

3. NPI と G 尺度との相関

NPI の13尺度とG尺度因子との関係を見るために、Pearson の相関係数を求めた（表3）。以下に、特に相関の高かった因子と尺度を挙げていくと、まず“一回生との親密化”因子は、“社会的外向性”と正の相関関係（ $r = .417, p < .001$ ）に、“非協調性”“劣等感”“抑うつ性”と負の相関関係（ $r = -.338, p < .001$ ； $r = -.275, r = -.285$, 共に $p < .01$ ）にあった。また、“共感性”“自己顕示性”“虚構性”とも有意な正の相関関係があった（それぞれ $r = .228, r = .206, r = .191$, いずれも $p < .05$ ）。“企画への充実感”因子は“非協調性”と、“上回生からの情報獲得”因子は“攻撃性”と、いずれも負の相関関係（ $r = -.283$ ； $r = -.253$, いずれも $p < .01$ ）が見られた。“上回生からの情報獲得”因子は“非協調性”とも負の相関関係にあった（ $r = -.205, p < .05$ ）。“教員との関係”因子は際立った相関関係にある尺度はないが、“進取性”“虚構性”と有意な正の相関が、“非協調性”“劣等感”と負の相関が見られた（順に $r = .191, r = .193, r = -.178, r = .216$, いずれも $p < .05$ ）。“情報獲得困難”因子は、“虚構性”と正の相関が見られ（ $r = .339, p < .001$ ），“自己顕示性”や“攻撃性”とは負の相関関係（ $r = -.220, r = -.206$, いずれも $p < .05$ ）が見られる。

表3 NPI の13尺度とG尺度との相関

		G 尺度				
		一回生との親密化因子	企画充実感因子	上回生からの情報獲得因子	教員との関係因子	情報獲得困難因子
NPI 尺度	社会的外向性	.417***	.102	.003	.136	-.011
	活動性	.149	-.050	-.058	-.033	-.054
	共感性	.228*	.068	.057	.018	-.105
	進取性	.090	.152	.009	.191*	.042
	持久性	.141	.170	.133	.060	.072
	規律性	-.035	.044	.084	-.110	.049
	自己顕示性	.206*	.061	-.059	.044	-.220*
	攻撃性	-.033	-.022	-.253**	-.082	-.206*
	非協調性	-.338***	-.283**	-.205*	-.178*	-.087
	劣等感	-.275**	.054	.079	-.216*	-.129
	神経質	-.084	.046	.106	-.085	.025
	抑うつ性	-.285**	-.008	-.001	-.109	-.082
	虚構性	.191*	-.004	.110	.193*	.339***

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

分かりやすく見るために、先に“非協調性”及び“虚構性”尺度とG尺度の各因子との関係について考えておきたい。“非協調性”は“情報獲得困難”因子をのぞく全ての因子と有意な負の相関関係にあるが、非協調的であるとオリエンテーションへの参加度が低いと考えられ、その結果獲得したものが全体を通じて少なくなった、と（相関であるため推測の域を出ないが）推測される。一方“虚構性”が“一回生との親密化”“教員との関係”“情報獲得困難”各因子と有意な正の相関にあったことは、「一回生と仲良くなれた」「教員とコミュニケーションがとれた」「獲得が困難なはずの情報得られた」とする回答が、社会的望ましさの影響を受けて肯定的に答えられた可能性が考えられる。“教員との関係”“情報獲得困難”因子に含まれる項目については、全体として調査対象となった今回のオリエンテーションにおいてそれほど獲得できなかったと一回生たちが回答している（佐久田ら、2003）。即ち、オリエンテーションにおいてこの2側面が十分達成されていたとは言い難く、その中でこの2因子が「得られた」と答えるのは、幾分「作られた」回答とも考えられるだろう。ところが興味深いのは“一回生との親密化”で、この因子は全体として得点がさほど低い訳でもなく、“教員との関係”“情報獲得困難”因子のように必ずしも獲得できなかったとは思われない。とすると、同回生と仲良くなるためには、嘘や建前といったある程度の虚構性が必要、ということの意味しているのかも知れない。

次に、“非協調性”および“虚構性”以外の尺度と各因子との相関について考察を行なう。“一回生との親密化”が上手く達成できたのが、対人的に外向的・共感的で、積極的に目立とうとする personality の持ち主であったことは、納得のいく結果と言えよう。逆に劣等感や抑うつ性の強い学生は、自己表現に引け目を感じるためか、同回生とあまりコミュニケーションを取れなかったようである。このように、同学年との対人関係の促進は、personality 特性の諸側面と様々に絡み合ったなかなか複雑な問題であることが示唆される。

それに対して、“企画への充実感”はさほど personality 要因と結びつかず、対人関係はさて置き、単純にオリエンテーションを楽しむこと自体は（協調性さえあれば）皆共通に体験するものであるらしい。オリエンテーションの内容が、“交友関係のきっかけ”と“企画”の2本柱で成り立っている（佐久田ら（2003）および本研究の考察“2. NPI の13尺度とE尺度・S尺度との相関”を参照）ことを考えると、この対照的な結果はオリエンテーションの内容を考える上で、一つの手掛かりを提供するであろう。即ち、オリエンテーションを“楽しむこと”自体は、企画がある程度きちんと仕掛ければ（それが難しいと言えそうだが）実現がそう困難ではない。問題は、その企画によって人間関係を上手く形作れるか（そのきっかけを提供できるか）であり、その点を練って考えることがオリエンテーションの内容を考えるにあたって重要であると思われる。

“上回生からの情報獲得”があまりできなかった、という一回生は攻撃性が強い。“上回生からの情報獲得”因子には、学生生活や授業に関する情報獲得の項目も含まれており、一概には言えないが、今回のオリエンテーションが上回生スタッフによって進められていたことから、新入生が主役のオリエンテーションという行事に、上回生が介入してくることに對して特に攻撃性の高い学生がネガティブな印象を持ち、そこで情報を得られにくくなったことが考えられる。しかし“上回生からの情報獲得”は他の personality 特性との関連は高くなく、上回生からの情報を得るための要因は、一回生の側よりも上回生との関係性や相性、情報を得られるような場の雰囲気などに帰せられると思われる。

“教員との関係”を上手く作るには、好奇心の強さが必要なようである。“社会的外向性”や“共感性”などの personality 特性が、同級生の友人との関係作りに関わっているのに対し、教員との関係にはあまり関連性が見られない。むしろ学生と教員とのコミュニケーションには、“モノ珍しさ”（進取性）が関与しているようである。教員への距離の遠さ、多少近寄りたいたい感覚が含まれているのかもしれない。加えて、今回のオリエンテーションでは教員を外向性などを向ける対象として見なすことが、学生に生じなかったとも言えそうである。劣等感が高いと教員との関係が

あまり取れていないのは、そのような学生は人と接すること（とりわけ教員）に対して尻込みして積極的でないからであろうと考えられる。

“情報獲得困難”因子と“自己顕示性”は負の相関関係にある。自己顕示的な人は初対面の場で自己を前面に出すことを中心的に行なう為、情報を得にくい内容はますます得られなかったのではないか、と思われる。“攻撃性”との負の相関は、今回のオリエンテーションであまり得られなかった“情報獲得困難”因子の内容に、攻撃的な学生が特に厳しく「得られなかった」と評価を下した可能性がある。但しこれらについての考察は十分な根拠があるとは言えず、今後さらに詳しく検討する必要がある。

今後の課題

本研究では、心理学の個々の学生の personality と関連させて、オリエンテーションの諸要素に関する考察を行なった。しかし、オリエンテーションへの態度に影響を与えるような学生たちの持つ個人特性は、他にも考えられるであろう。例えば、学年が進み学生生活を体験することによって、入学時に本当に必要とされるオリエンテーションとは何かという考えが変わる可能性がある。即ち、学年の違いによる対オリエンテーション態度の差違が考えられる。また、本学科では毎年一定人数の内部進学者を受け入れており、そのような内部進学者と他の一般の高校から進学してきた者では、オリエンテーションの持つ意味合いが異なることなども予想される。これらの個人特性との関係から、オリエンテーションについて吟味することもまた必要であり、今後明らかにしていく予定である。

引用文献

- 浅野 誠 2002 授業のワザ一挙公開 大月書店
 古沢由紀子 2001 大学サバイバル 集英社新書
 佐久田祐子・奥田 亮・川上正浩・坂田浩之 2003 個人特性が心理学オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響（1）——オリエンテーションに対する態度の基礎データ—— 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 2
 島田博司 2002 メール私語の登場——大学授業の生態誌 3 玉川大学出版部
 柳井晴夫・柏木繁男・国生理枝子 1987 プロマックス回転法による新性格検査の作成について（I）心理学研究, 58, 158-165

注

- したがって、本研究において分析されるデータの一部は、佐久田ら（2003）によって報告されているデータと同一のものである。
- 二回生は、一部がスタッフとして本年度のオリエンテーションにも参加したが、多くは体験していないため、④の内容は除外した。
- “虚構性”は lie scale（虚偽尺度）であり、高得点であればテストに対して虚偽的態度で回答していると見えず一種の信頼性得点であるから、 α 係数は算出していない。
- ある意味では自然な結果であるが、進取性や活動性などと大学の学業満足が結びつくような、即ち好奇心を持って積極的にものごとを展開させていく傾向と大学での学業がリンクするような側面は見られないとも言えよう。ただ、一・二回生の基礎的な実習・授業を中心とした段階では、専門的内容に興味を持って自主的な研究をゼミ等で展開する（三・四回生に期待されるような）態度を持ちにくいのは無理からぬ結果かもしれない。

Some effects of personal traits on the attitude to the fresher orientation event (2)

—The relationship between the attitude to FOE
and the personality traits—

*Akira Okuda • Masahiro Kawakami •
Hiroyuki Sakata • Yuko Sakuta*

Abstract: The purpose of this study was to investigate the relationship between students' personality trait and their attitude to the fresher orientation event (FOE). With the questionnaire of the students' expectation to the FOE (E-scale), the gain they recognize to have got in their FOE experience (G-scale), and the satisfaction they feel in their university life (S-scale), the attitude to the FOE was measured. And as the measure for the personality trait, the NPI scale (Yanai, Kashiwagi, & Kokusho, 1987) was used. The results showed that students expect FOE both the aspect of enjoying event and that of the starter for their friendship in their university life. And the results of the correlation analysis showed that some personality traits had influence on the performance on the latter aspect of FOE. The results let us plan the FOE as the suitable trigger for their relationship in university life.

Keywords: fresher orientation event, personality, student life